

# あいち平和映画祭2011プレ企画 『沖縄』上映会

# 沖縄

劇  
映  
画

あの感動のたたかい いまこそ語り伝えたい



制作担当:山本薩夫・伊藤武郎  
演出:地井武男  
二部  
一坪たりともわたすまい  
怒りの島  
一  
二  
部  
部  
鈴木  
戸浦  
六宏  
トニー  
花沢  
徳衛  
和田ほか  
佐々木  
佐々木  
佐々木  
みみ江  
飯田  
蝶子  
脚本・監督:武田敦  
地井武男  
佐々木愛  
佐々木  
岩崎信忠  
富山真沙子  
加藤嘉  
山本薩夫・伊藤武郎  
佐々木愛  
佐々木  
岩崎信忠  
富山真沙子  
加藤嘉

## 4月2日(土)

伏見ライフプラザ  
12階 第1研修室

地下鉄「伏見」駅 6番出口南へ400m(中消防署ビル)

1部 2部  
連続上映

第1回上映 13:00 ~ 16:30  
第2回上映 17:00 ~ 20:30  
いずれの回も1部と2部の間に10分間の休憩あり

入場料金

前売・予約:800円 当日:1000円

大学生以下:500円

前売・予約は下記の実行委員会まで

主催:あいち平和映画祭2011実行委員会(代表 稲垣美智子)  
後援:名古屋市

あいち平和映画祭2011  
5月28日(土)  
ウィルあいちホール

上映作品

ANPO  
インビクタス / 負けざる者たち  
カティンの森

連絡先 TEL:052-938-5402 Mail: a9s-n-kato@nifty.com  
HP:<http://aichiheiwa.movie.coocan.jp/>

多くの人に見ていただきたい

阪井芳貴

名古屋市立大学教授・美ら島沖縄大使

なぜ、40年も前のモノ  
クロの、非常にハードな内  
容の映画が、復活したのか?  
それは、民主党政権発  
足により、にわかに国を搖  
るがす政治課題・社会問題  
となつた普天間飛行場移設  
問題が、やがて混迷混沌を  
経て絶望と不信のみを残す  
形で終熄していつた、その  
脱力を再び活力に切り替え  
るきっかけにしたい、とい  
う思いが募つたからであろ  
う。

「復帰」というひとつのがれ（それはそれで問われなければならぬが）をもたらしたその歴史を学び、現在の閉塞状況を破壊する力をここから得なければ、意味がない。また、昨年来、「沖縄差別」ということばが沖縄では頻繁に語られてゐるが、「差別している」ヤマトウノチユにはその自覚がない。両者の間にある深い溝を埋める作業も、この映画を観ることから始まられると思っている。多くの人に見ていただきたい。

「70年に公開された映画「沖縄」が、このたび名古屋で上映されるという。第一部・「一坪たりともわたくすまい」、第二部・「怒りの島」の二部構成、上映時間3時間超の大作の上映は志のある方達の熱意がなければ、成り立たない。それが昨年、京都や沖縄をはじめ全国で上映会が催され、静かなうねりとなり、名古屋にも届いたということになる。

この「沖縄」上映会が開かれた。つまり、沖縄県民全体を搖るがす動きがあるたびに、連動して上映されたりきたと言えるのだが、それは「70年当時と『今』とが変わつていないこと」を確認する場としての役割を担つてきた、ということを意味する。

しかし、確認はもうこれきりにしなければと思つ。この映画で描かれる農民の土地闘争・金重労のストが、

「日米合意」後本土マスコミの多くは、日米同盟重視の視点から辺野古への新基地建設を容認する論調を繰り広げています。このような動きに抗して、いま、本土各地で劇映画「沖縄」の再上映運動を通して、沖縄への関心を喚起しつつ、県民の闘いに連帯する動きが始まっています。“復帰運動のよう、あの島ぐるみの運動をもう一度”的の思いを込めて再上映を行います。安仁屋政昭ほか

な映画です。第一部では、土地を奪われた島民たちの怒りと闘いを描いています。第二部では、教育労働者基地労働者たちの共通の“民族の自覚に燃えた怒り”を主題に、全編を通じて沖縄の即時無条件全面返還のたたかいを描いています。

# 劇映画

沖  
繩

沖縄では昨年10月  
から各地で再上映  
されています

沖縄県上映会チラシの  
「かいせつ」から

## あいち平和映画祭2011 実行委員のひとこと

注意深く聞けば、米軍に寄り添つた人々は単に受け入れたのではなく、理不尽を能動的に引き受けて生きるという覚悟を持っていることが窺える。その尊厳に目を背け、負わすままでいいのか。

「昔はね」ではなく「今もね」と教えてくれている「変わらないよ」と。

沖縄だけの問題ではなく、この国の昔と今、そして未来の在り方をも教えてくれた良い映画でした。

まず、ハッと昔を思い出した場面は、基地内に侵入して薬莢拾いをする貧しい島民たちと、ベトナムに向かって次々に発進される悪魔のような巨大で真っ黒の長い胴体と翼の爆撃機でした。北爆による非道な殺戮行為が本格化し、沖縄はその最大の発進基地の役目を担わされた痛々しい姿でした。

一方、当時の本土はこの沖縄の多大な犠牲の上に乘っかり、高度成長にまっしぐらの時でした。初めての海外出張



労働団体の古株（失礼）の方の話によるとこの映画、当時はバイクにフィルムと映写機を積んで上映会場を巡ったとのこと。そんな熱気の一端でも、今回の上映会に来ていただいた観客の皆様に伝わりますように....。

ますます斜陽化する邦画界で、67年「若者たち」がヒット。久しく沈黙していた独立プロダクションが再び注目を集めた。そして安保と万博の年70年に、この「沖縄」で返還を訴えた